



かわはく No.9

CONTENTS

遊んで学べるさいたま川の博物館 - 利用法 -	2
テーマ展示 「荒川之美 ~ 浮世絵に描かれた荒川(隅田川)の四季~」...	4
川をめぐることは「河岸段丘」.....	5
テーマ展示 「荒川と人々の暮らし~荒川が育んだ秩父の織物~」.....	6
かわはく日誌	7
教育普及活動のご案内	8



遊んで学べる博物館

利 用 法

「大きな！この水車には乗れるのかな？（大水車）」「ぼくの家はどのへんかな？（荒川大模型173）」「荒川の水はきれいですか？（学芸職員への質問）」これらの言葉は、当館を訪れた子どもたちの驚き・つぶやき・質問などです。さいたま川の博物館は、平成9年8月1日に開館しましたが、今年度の8月30日には、開館以来の入館者が90万人に達しました。毎年学校の利用は増加しています。平成11年度においては、本館及び荒川わくわくランドでは中学生以下の利用が8万人を越えました。利用地域は埼玉県を中心に群馬県・東京都・千葉県などで300校近くの学校の利用がありました。小・中学生の学校利用は、遠足などでの集団による利用と班活動や個人での調べ学習による利用、館有資料を学校が借用しての活用、学芸職員の質問などがありますので紹介します。

「参加体験型」の利点を活用

「川を見る 川を感じる 川を知る 体感する博物館」が当館のコンセプトです。実体験や疑似体験をとおり体感するなかで感性も育ち、水環境を守り育む意識も高まって行くと考えています。小学生の活用では「荒川わくわくランド」と「アドベンチャーシアターかわせみ号」が人気の高い施設で、平日の学校利用では事前に予約をすることができます。荒川わくわくランドは、ウォーターアスレチックを楽しみながら、水とふれあい身体で感じながら水の科学的性質を体感する施設です。「アドベンチャーシアターかわせみ号」では2本のソフトがあり、荒川やライン河の川下りを疑似体験し、水と人々のくらしとの関わりに触れることが出来ます。本館のワークショップでは約2,800気圧の水流で紙を切断する体験もでき、水の力に驚きと感動があり子どもたちに大人気です。驚きや感動から学習意欲が喚起されることを期待しています。

「利用の手引き」の活用

当館では、小中学生の利用促進のために「さいたま

川の博物館利用の手引き」を作成しました。作成にあたっては、現場の教師から提言助言をいただき、内容を検討し、また、小学校4年生が活用できるように漢字にルビをふりました。4年生の社会や理科の川に関する学習を踏まえて作成しました。内容は展示や施設全体を取り上げていますので、学習のねらいに合わせて選択して利用できるよう一枚一枚をバラバラにしました。遠足や校外学習の「遠足のしおり」や「博物館見学のしおり」、社会科見学や理科学習の「学習課題」



水を科学するウォーターアスレチック

の版下として使用できます。小中学校等の学校教育計画に基づいた学習やその下見、部活動における利用では、本館の入館料の免除規定がありますので、その手続きのための「入館料免除申請書」も付けました。また、見学コースのサンプルも紹介してあります。

今年の秋は、「利用の手引き」を活用した「しおり」を持って来館する学校がたいへん多くなってきました。学習課題を明確に表現した「しおり」「学習プリント」などを持って来館した子どもたちは、その課題を解決するために展示を見学し探し記録を取っています。メイン

展示室である第一展示室は、大型映像と展示解説イベントや実物大の大型模型により劇場的な雰囲気を出してありますから、子どもにとって興味を引くことが多く、あちらこちらへと気移りするようです。意識や



さいたま川の博物館利用の手引き



利用促進研修会水質検査「荒川の水を調べる」

「総合的な学習の時間」では！
今年度は、グループ単位の来館が増え、展示を見たり、荒川情報局（情報提供室）で、図書やパソコンで調べ学習を進めています。また、学芸職員へも直接質問を投げかけて、熱心に聞き取り調査を実施し、課題解決に迫っていました。また、インターネットホームページでは、川に関する質問回答集を公開して、双方向による情報交換の場づくりを進めています。

博物館の活用例として、「総合的な学習の時間や選択教科における自分の課題を探そう」などの視点で「ゆとり」を生か

した利用も考えられます。「川にまつわる生活の知恵を先人たちに学び、川と人々のくらしとの関わりを感じたり、水と触れたり遊んだり」することにより、自分の課題を見つけることもできることと期待しています。

＜おわりに＞

博物館の学校利用も多様化してきています。従来型の遠足や校外学習の集団での活用のみならず、グループや個人で、学校や自宅から電話やメールでの質問、インターネットによる検索や学芸職員への直接質問など様々です。これからも積極的に当館を活用いただくなか、子どもたちの自己実現を願うとともに、川との

学習の視点を集中させるためにも「利用の手引き」を是非活用ください(問合せ先:当館学芸一課)。「利用促進研修会」を実施

小学校の先生方を対象とし、平成11年度から夏休み中に実施しています。今年度は「利用の手引きの紹介」



総合的な学習の時間

「展示や施設の見学」「水環境を考える体験学習『荒川の水を調べる』の実習」を中心に行いました。体験学習では、先生方に荒川の水と湧水を採取していただきCOD(化学的酸素要求量)等の検査を実施し、生活排水による川の汚れについて考える視点を提供しました。その他、「博物館を活用しての学習例」や、現在整備を続けている学校への貸し出し用ローンキット「写真パネル(荒川の水質浄化)」の紹介をしました。



荒川大模型 173 先生から説明をうける児童

共生を考え、川との賢いつきあい方を見だし、未来の健全な川づくりの手がかりとしていただけたらと思っています。

(学芸一課主査 根岸康雄)



平成 12 年度 第 2 回テーマ展示

荒川の美

浮世絵に描かれた荒川(隅田川)の四季

当館では、「荒川を中心とする河川や水と人々の暮らしとの関わり」を治水・利水・親水の観点から総合的に調査研究しており、そのために川の歴史・文化・自然に関する資料を収集しています。収集資料の一つに、荒川(隅田川)を描いた浮世絵があります。

今回のテーマ展示では、荒川(隅田川)を描いた浮



東京名所 向島吾妻橋之真図 鳥居幾英 / 明治

満開の桜の下は花見客で賑わっています。ハイカラな洋装の婦人が衆目の的になっています。

世絵を取り上げ、江戸・明治期における四季の移り変わり、それに関わる人々の暮らしと風俗を紹介しようとするものです。

浮世絵あれこれ

浮世絵とは、江戸から明治にかけて描かれた風俗画のことで、特に版画において独自の画風を発達させました。

江戸時代の中頃には多色刷りの版画(錦絵)が現れ、浮世絵は黄金期を迎えました。絵の題材は遊郭・芝居・相撲などの流行ものであり、そこには美女(「美人画」)・役者(「役者絵」)・力士(「相撲絵」)などの似顔絵が描かれました。やがて歴史的な出来事を題材にした「歴史画」や花鳥風月を表した「風景画」、時事的な

「風刺画(鯉絵など)」も描かれるようになりました。

現在、浮世絵は美術品として高い評価を得ています。しかし、現代風に言えば「美人画」は女性タレントや女優、「相撲絵」はスポーツ選手のブロマイド、「風景画」は絵葉書に対応するものだったのです。江戸庶民にとっての浮世絵は、立ち食い蕎麦一杯の値段つまり現在の金額に換算すれば500円程度で購入できる廉価なものでした。

荒川(隅田川)の四季

荒川(隅田川)やそれに架かる橋は観光名所であり、風景画の題材となりました。そこには春には桜・夏には花火・秋には月や紅葉・そして冬には雪などの季節を象徴する題材が多く描き込まれました。またこれらの観光地にくり出す江戸庶民の姿も生き生きと描かれています。

江戸時代後半になると経済的に余裕の生まれた人々は、日帰りの行楽や

伊勢参り・札所巡りなどの長旅もできるようになりました。「名所江戸百景」などは日帰りの行楽、「東海道五十三次」などは長旅のためのパンフレットであり、これらのガイドの役割も果たしました。

また浮世絵は、江戸に単身赴任していた武士が帰郷する際のおみやげにもされました。浮世絵は、あこがれの江戸に想いを馳せる格好のものだったのです。

隅田川の風景

武蔵国を流れる荒川は、江戸に入ると隅田川と名称を変えます。荒川・隅田川は船運が盛んで、農村からは米・麦・薩摩芋・醤油などの農産物、江戸からは塩・酒・下肥が運ばれました。

「隅田川兩岸一覽」・「絵本隅田川兩岸一覽」・「隅田川叢

コラム・浮世絵と錦絵の違い!?

浮世絵とは、戦国時代以降に肉筆の風俗画・美人画を中心として出現しました。江戸時代には、特に版画において独自の画風を発達させました。江戸時代の中頃になると、多色刷りの版画が開発されました。この多色刷り版画は、京織物の錦にも匹敵するという鮮やかさから江戸錦と呼ばれ、それ以降多色刷の浮世絵を「錦絵」と称するようになりました。なお、多くの色を重ねた刷りが可能となったのは、和紙の性能が向上し破れにくくなったことが錦絵を誕生させる大きな要因でした。以後、浮世絵と錦絵はほぼ同義語になりました。



誌」には、隅田川やその周辺の様子が紹介されています。「隅田川兩岸一覽」の乾の巻には、東岸の永代橋から千住大橋、坤の巻には西岸の真崎稲荷から佃島までの名勝地が四季折々の風情を醸し出しながらかかれていきます。川面には多数の荷船・高瀬船・屋形船・渡し船・筏流しなど、また両国橋の上には荷を担ぐ人・物売り・馬上の武士などの多くの人々が描かれ、江戸の繁栄と混雑した様子が描かれています。



東都隅田川 歌川広重(二代) / 江戸

武士と芸者が川船に乗って花見をしています。渡し船には猿回し、角兵衛獅子、三味線を抱えた旅芸人の一行が乗っています。

またコラム1として師弟関係にある明治の浮世絵小林清親と井上安治の作品、コラム2として江戸期の「ロンドンの川景色」(1780年刊)を展示しました。

(学芸二課 主任調査員 中村倉司)

川をめぐることば

河岸段丘

表紙の写真は玉淀大橋上空から川の博物館方面(南西方向)を映した写真です。川の博物館が写真中央の川辺に建っているのがわかりますか。川の博物館の後ろに続く数十mの崖は「段丘崖」、その上に続く平坦な面は「段丘面」といいます。このような階段状の地形は「河岸段丘」といわれる地形で、川がつくった地形であることはご存じの方も多いと思います。しかし、

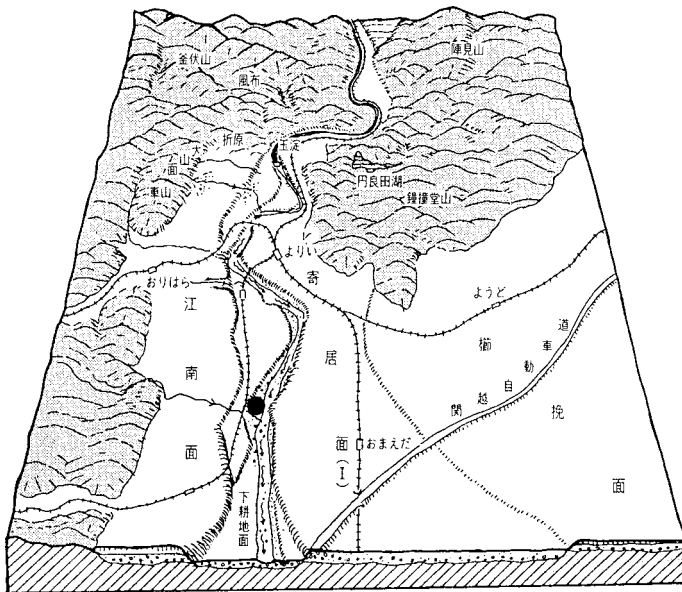
なぜ段丘ができるのか考えたことがありますか。

河岸段丘が形成されるためには流域になんらかのダイナミックな変化がおこらなければなりません。かつては「段丘が3段あれば3回土地が隆起したことを示す」というように説明されることが多かったのですが、関東地方を中心に各地の河岸段丘の研究がすすみ、その形成された年代がわかってくるにつれて、「地殻変動」に加えて「気候変動」という

グローバルな現象が関係していることがわかってきました。気候が変動すると、北極や南極付近の氷河が凍ったり融けたりすることで海面の高さが変わることで、気温の変化によって土砂の生産量が変わること、降水量の変化によって川の流量が変わることなどによって、土砂が堆積する場所や川が下へ削り込む場所が変化します。そのため、それまで広い河原だったところが、下へ削り込まれるようになると、このような地形ができると考えられています。

この他に、火山活動などによる急激な土砂の増加の影響によっても、河岸段丘ができることがあります。

(学芸一課 学芸員 井上素子)



現在の川の博物館周辺の地形(「寄居町史」に一部加筆)

川の博物館の上には大きく分けて「江南面」「寄居面」といわれる2面の段丘がみられます。「江南面」は約10万年前の間氷期(温暖な時代)、「寄居面」は約3~1万年前の氷期(寒冷な時代)に荒川の川原だったと考えられています。荒川が現在の場所を流れるようになったのは約1万年前(縄文時代のはじめ)に急激に地球が温暖化してから。

(はさいたま川の博物館の位置)



平成12年第3回テーマ展示

『荒川と人々のくらし』

- 荒川が育んだ秩父の織物 -

開催にあたって

1 はじめに

かつて川の水や湧水は生活に必要な水として、直接人々に利用されてきました。そのため、川や湧水のわき出る水の豊かなところには人々が集まり、水の恵みに感謝しながら、さまざまな生活が営まれてきました。そして、次第にその土地の気候や風土に適した、多様な文化や産業を発展させてきたのです。

今回のテーマ展示では、秩父地方の湧水や荒川及びその支流の水が、この地方の人々の生活にとって必要不可欠なものであり、その水を中心に人々の生活が営まれ、さらに文化や産業が発展してきたことを、秩父織物との関わりにおいて紹介します。

2 秩父市内の湧水

秩父地方は荒川の河岸段丘域にあたり、幾段もの段丘が発達し、段丘の崖下から流れ出す清らかな湧き水



妙見七ツ井戸調査の様子

や井戸水を、「くらしの水」や「産業の水」として、大切に使ってきました。

特に、宮地地区には妙見七ツ井戸とよばれる七つの井戸があり、地元の人々によって大切に

利用されてきました。今でも七つの井戸のうち、四つの井戸は残っており、宮地地区の若衆は秩父夜祭りの朝、それらの井戸と妙見塚のお参りをした後、屋台の引き回しに出かけます。

3 清流に生息する生物

右の写真は、妙見七ツ井戸の一つから湧き出した湧水が流れている水路に生息しているマシジミとカワニナです。



かつて、この水路 湧水に生息するマシジミとカワニナ

にはマシジミ・カワニナの他、たくさんの種類の生物が生息し、ホタルも飛び交っていましたが、生活排水の流入により水質が悪化し、これらの生物もほとんど見られなくなりました。ところが、その後、下水道が整備され水がきれいになると、再びマシジミやカワニナなどが生息するようになりました。いつかこの水路にホタルも見られるようになるかもしれません。

4 手入れの行き届いた桑畑

秩父地方は山間地のため、土質や地形は米麦には適さず、桑やコンニャクの栽培等に適していました。そのため、この地方では古くから養蚕が盛んに行われ、人々の生活を支えてきました。下の写真は、昭和35年の秩父の様子です。手入れの行き届いた桑畑が一面に広がっていて、養蚕が盛んであったことがよくわかります。



長尾根丘陵の桑畑から見た武甲山
(昭和35年井上光三郎氏撮影)

今回は、「秩父の織物」を育んだ秩父の湧水と桑畑について紹介しました。次回は、秩父の養蚕や織物について紹介します。

(学芸二課主査 野口光一郎)

開催期間：前期 平成13年1月6日～3月11日

後期 平成13年3月17日～5月6日

ワークショップ：平成13年4月28日

「川原の草木で染め物をしよう」

伝統工芸士の指導により、絞り染めを行います。定員30人(申込順)

保険料100円、他材料費が必要です。



かわはく日誌

7月1日～11月30日



七夕飾り みんなで願い事を笹の葉に結びました

- 7月7日 川の日記念イベント「七夕づくり」短冊に願いを書いて笹の葉に結び付ける(143人)
- 7月8日 子ども放送局「森は海の恋人の秘密をさぐる」ほか(26人)
土曜おもしろ博物館「川辺の昆虫を集めよう」川辺の昆虫を採集して標本を作る(31人)
- 7月9日 川の日記念イベント「七夕づくり パート 」短冊に願いを書いて笹の葉に結び付ける(423人)
- 7月16日 映画会「那須疎水物語」「風ものがたり」(31人)
- 7月16日 ガリバーウォーク ボランティアによる荒川大模型の展示解説(32人)
- 7月22日 子ども放送局「本はともだち」ほか(36人)
- 7月23日 カワシロウ講座「荒川流域の水収支」講師:細田浩(埼玉県立浦和第一女子高校教諭)(32人)
- 7月30日 荒川劇場「水天宮のお囃子」御座船に乗って奉納する神田囃子の上演、茅町神田囃子保存会(寄居町)
- 8月1日 水の日記念イベント「日本の利き水」日本各地の名水を集めて利き水をする(138人)
- 8月5日 かわはく夏祭り
太鼓演奏・ブラスバンド・シャボン玉・工作教室・ミニSSL・的当てゲーム・利き水など実施、全館ライトアップも行った。(5631人)
子ども放送局「まるかじり自然体験」ほか(63人)



かわはく夏祭りの工作教室 ぼんぼん船と水車が大人気でした

- 8月20日 映画会「ガンバとカワウソの冒険」(104人)
- 8月25日 利用促進研修会、さいたま川の博物館の概要説明及び研究協議並びに施設見学学校現場の教師を対象とした研修会で当館作成の「利用の手引き」の活用法についても解説(36人)

- 8月30日 防災週間記念展示「上半期の災害」オープン 9月10日まで開催、防災週間を機会に日本における上半期の災害をパネルで紹介する。展示資料10点入館者90万人達成、花田麻実氏(7歳)が90万人目の入館者となった。証明書及び記念品授与
- 9月9日 土曜おもしろ博物館「荒川の魚ウォッチング」溪流魚などの生態を観察し触れる(59人)
子ども放送局「手作りみこしでワッショイワッショイ」ほか(59人)
ガリバーウォーク、ボランティアによる荒川大模型展示解説(25人)
- 9月10日 防災週間記念イベント「はしご車を体験しよう」消防本部によるはしご車の搭乗体験(175人)
- 9月16日～10月29日 テーマ展示「荒川之美」浮世絵に描かれた荒川の四季を紹介
- 9月17日 映画会「走れ白いオオカミ」(14人)
- 9月23日 子ども放送局「夢をのせてトロッコ列車が走る」ほか(20人)
ガリバーウォーク 学芸職員による荒川大模型の展示解説(10人)
- 9月24日 ガリバーウォーク ボランティアによる荒川大模型の展示解説(40人)
- 10月14日 ボランティア養成講座「埼玉の河川とさいたま川の博物館」講師:沼野勉(当館専門調査員兼学芸第一課長)(6人)
土曜おもしろ博物館「川辺の漂着物を集めよう」漂着物を集めて分類し原因を考える(19人)
子ども放送局「ゲームの世界と著作権」ほか(19人)
ガリバーウォーク、ボランティアによる荒川大模型展示解説(16人)
- 10月15日 映画会「それいけコロリン」(41人)
- 10月21日 ボランティア養成講座「屋外施設の配置と役割」伴瀬宗一(当館学芸第一課学芸員)(7人)
ガリバーウォーク、ボランティアによる荒川大模型展示解説(16人)
- 10月22日 野外教室「荒川を歩く」上長瀬から秩父市黒谷までの荒川観察(35人)
川辺の県民交流イベント「和太鼓の演奏と踊り」上尾和太鼓の会「若駒」(244人)
- 10月28日 ボランティア養成講座「荒川大模型は語る」井上素子(当館学芸第一課学芸員)(6人)
子ども放送局「田村亮子の金メダルへのチャレンジ」ほか(30人)
- 10月28日 ガリバーウォーク、学芸職員による荒川大模型展示解説(19人)
- 10月29日 荒川劇場「川と仕事唄」土手普請の作業の際に歌われるタコ搦き唄の上演、たこつき倶会(東松山市)(193人)
- 11月11日 土曜おもしろ博物館「水の模様を記録しよう」水面にできる模様を紙に写し取る(49人)
子ども放送局「グッチ裕三の言葉は不思議」ほか(59人)
ガリバーウォーク、ボランティアによる荒川大模型展示解説(36人)
- 11月14日 県民の日記念イベント
工作教室・ベーゴマ・映画上映・シャボン玉・コンニャクづくり・餅搗き踊りの実演公開などのほかに、施設の無料解放を行い、夜は8時30分までライトアップを実施(7718人)
- 11月19日 映画会「長江悠々」(32人)
- 11月25日 子ども放送局「里中満智子の漫画の世界」ほか(22人)
ガリバーウォーク、学芸職員による荒川大模型展示解説(20人)
- 11月26日 ガリバーウォーク、ボランティアによる荒川大模型の展示解説(39人)

開館以来の入場者数 97万 2362人 (11月末現在)

教育普及活動のご案内 - 楽しく、ためになる「かわはく」 -

1月

子どもが描く荒川の絵画作品展

平成12年12月23日 ~ 1月20日

幼児の部、小学生の低学年・高学年部、中学生の部の3分野、本館二階ふれあいホール9:30~16:30費用無料

平成12年度第2回テーマ展示

「荒川と人々の暮らし」~荒川が育んだ秩父の織物~
(前期)1月6日 ~ 3月11日

(後期)3月17日 ~ 5月6日

【ワークショップ】

「川原の草木で染め物をしよう」(申込順)

4月28日 詳細は6ページ

21日 荒川劇場「川と民謡」

時間 11:00 ~ 11:30 と 13:30 ~ 14:00

尺八の音色とともにきだし唄や筏流し唄などを紹介します。要入館料。

シネマかわはく「石を架ける」今も九州に残るさまざまな石橋の価値、大切さを訴える。 13:30 ~ 14:10 14:30 ~ 15:10

13日 土曜おもしろ博物館「草木染めにチャレンジ」主に川辺に生育する植物でできた染料を使ってハンカチを染める。 10:30 ~ 12:00 14:00 ~ 15:30 (申込順)

子ども放送局

「国会大捜査線~子ども編集委員企画番組~」など

27日 子ども放送局

「小さな力士舞の海の痛快土俵人生」など

ガリバーウォーク

学芸職員による荒川大模型173の展示解説

28日 カワシロウ講座・後期テーマ『暮らしと川』第1回「川に親しむ」川や自然とのふれあいを通して川遊びの楽しさを考える。講師石川友一氏(秩父の環境を考える会会長)13:30~15:30(申込順)

2月

10日 土曜おもしろ博物館「身近な水を調べよう」川をはじめ身近な水を採取して水質を測定し、川を汚さない暮らしについて考える。 10:30 ~ 12:00 14:00 ~ 15:30 (申込順)

子ども放送局「宇宙」フィルムケースロケットづくりほか

18日 シネマかわはく「せんぼんまつばら」濃尾平野の大規模な治水工事を命じられた薩摩藩。堤に植えられた松原が先人達の苦勞を伝える。 13:30 ~ 15:00

24日 子ども放送局「2002年ワールドカップへの道」

25日 カワシロウ講座・後期テーマ『暮らしと川』第2回「日常生活と川」暮らしにおける水の消費と排水処理の実像を考える。講師 沼野勉(さいたま川の博物館専門調査員兼学芸第一課長) 13:30 ~ 15:30 (申込順)

ガリバーウォーク ボランティアによる荒川大模型の展示解説 12:30 ~

3月

10日 土曜おもしろ博物館「コンニャクづくりにチャレンジ」コンニャクづくりを体験するとともに、コンニャク粉の製造過程を体験する。 10:30 ~ 12:00 14:00 ~ 15:30 (申込順)

子ども放送局「織作峰子の写真の世界」ほか

18日 シネマかわはく「三ねん寝太郎」怠け者の「寝太郎」が湖から村へ水を引く用水路を完成させる。 13:30 ~ 14:20 14:30 ~ 15:20

20日 川の音コンサート

時間 13:30~15:00 場所 当館ふれあいホールフルート4重奏が奏でる川や水に関わる管楽をお楽しみください。(申込順3月1日申込開始)

24日 子ども放送局「ピーター・フランクの大道芸の世界」ほか

25日 カワシロウ講座・後期テーマ『暮らしと川』第3回「川の防災対策」災害情報をいち早く知らせる技術の最先端などを紹介します。佐々木春喜氏(関東地方整備局河川管理課課長補佐)13:30 ~ 15:30 (申込順)

申込順のものは約1ヶ月前から受け付けています。参加はどれも無料で、定員になりしだい締め切ります。

インターネットでも情報が紹介されています!

<http://www.kumagaya.or.jp/kawahaku>

【お願い】 行事は都合により変更になることもあります。ご了承ください。川の情報もお寄せください。

表紙の解説 写真は、玉淀大橋上空からさいたま川の博物館を撮影したものです。詳しくは「川をめぐることば」(P5)をご覧ください。

編集・発行

さいたま川の博物館

〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園39

TEL048 581 7333/FAX048 581 7332

2000年12月25日発行